



TITLE:

人文 第22号

AUTHOR(S):

---

CITATION:

人文 第22号. 人文 1980, 22: 1-28

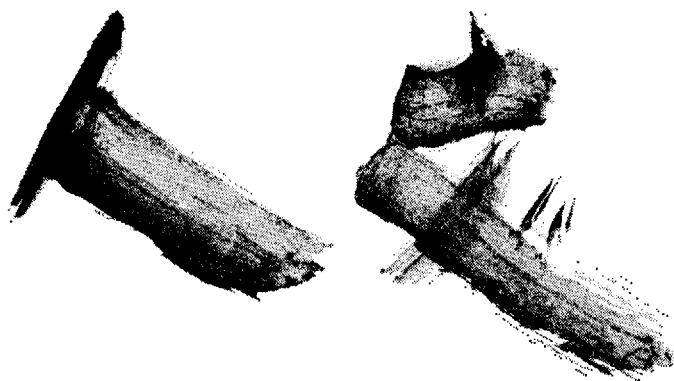
ISSUE DATE:

1980

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57148>

RIGHT:

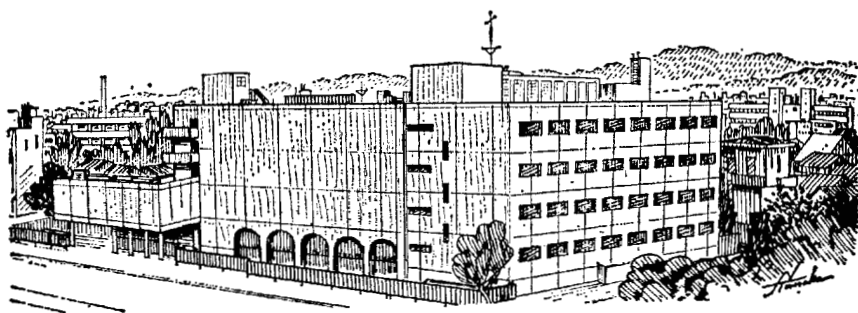


第二二号



1980

京都大学人文科学研究所



## 人 文 第二号

1979年12月—1980年5月

### も く じ

#### 随 想

たったひとりの索引

柳田 聖山

2

壮兵をめぐって

古屋 哲夫

十三年ののち

宇佐美 斉

#### 講 演

退官記念講演

経済史と政治史のあいだ

河野 健二

7

#### 本のうわさ

飯沼二郎『歴史のなかの風土』（見市・上田篤）『くるまは弱者のもの』（富谷・吉田光邦）『技術文明と宗教——理性と感性のあいだ』（矢野）・山田慶児編『中国の科学と科学者』（桑山）

9

#### 共同研究の話題

『弁正論』の会説

磯波 護

モンテスキューを憶う

樋口 謹一

14

#### 旅

北京一ヶ月留学記（小野和子）・パッツフォード・アルボリータム（横山俊夫）・ヨーロッパの土俗信仰（山下正男）

16

書いたもの一覽（一九七九年二月—一九八〇年五月）

24

人のうごき（23・28）・お客さま（8）・おくりもの（22）・計報と叙勲（22）・漢籍講習会（13）・建築（23）・感銘を受けた本（21）

## たったひとりの索引

柳 田 聖 山

禅語のカード作りに熱中したのは、何時であつたろう。指を折ると、もう三十年も前のことだ。

当時、佐々木ルース夫人のところへ、わたくしは、禅録の英訳を手伝っていた。研究所からは入矢義高先生、今は東京都立大教授の金関寿夫さん、コロンビア大学のワトソン、ヤンボルスキー、ハーヴィツといった新進の学者が集まっていた。アメリカのビートの詩人スナイダー、フランスのジャック・メイさんなどもいた。アメリカの学者はすべて米軍の出身で、日本語を勉強するために、上田万年編の「大字典」を使っている。

この辞典の特色は、部首に番号をつけて、画数とくみあわせると、すべての漢字が数字化できる仕組みになっていることだ。わたくしの仕事は、人名その他の禅語をカード化し、この辞典の仕組み通りに分類することだった。生れて始めての珍しいカード作りが気に入って、単純作業に精をだした。あたまは空っぽだが、約五万語のカードが、引き出しに収まる。わたくしは、糊とハサミで論文を書く技を覚えた。

余勢をかって、祖堂集の完全な一字索引をつくってみようと思いたつ。現存最古で、誰も読み通していない、朝鮮伝来の禅宗史書である。全巻約二十万字、ひとりではとても無謀な計画だが、わたくしはすでにカード病にかかっている。同じ頃、広島大学から「文選索引」が出たのに勢を得た。せめてこれく



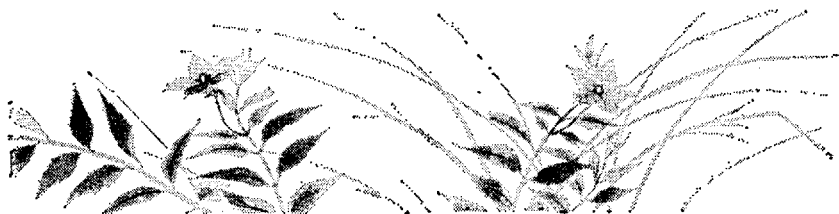
らしい、というのが目標であった。

幾つかの助成金を得て、カード作りは順調に進んだが、折しも全国にたかまの大学改革の時期となる。東大資料編纂所のフィルムが焼かれ、立命館大学のわだつみ像がこわされた。わたくしは、幾夜もカードのある部屋に、ひとりで泊り込む。だが、入矢先生は名古屋で負傷され、佐々木夫人も亡くなる。学生運動は不発に終り、わたくしを助けてくれた学生も、次々に離れてゆく。幸いに櫓の木は残ったが、わたくしはぼんやりと、二十万のカードをもてあます。「研究所に来ませんか」、思いもかけぬ島田虔次先生の、蜘蛛の糸である。カードと一緒に研究所に引き越して五年、今度は国費による出版の幸運がめぐってくる。ありがたいことにちがいないが、部首分類という古風なこの索引が、果してどれほど一般研究者の利用に堪え得るだろうか、ひよっとすると、たったひとりの索引になりはしないか。複雑な気分で、校正に忙殺されている昨今である。

## 壮兵をめぐつて

古 屋 哲 夫

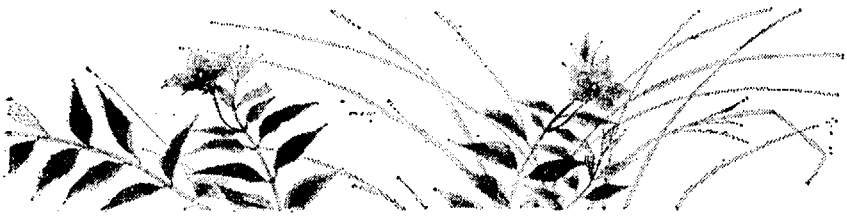
廃藩置県の直後、明治四年七月に制定された「兵部省職員令」をみると、兵部卿の権限が「海陸軍賦壮兵海防守備征討発遣兵学繰練等ノ事ヲ総判ス」と規定されているのにつかる。そこでこの「賦壮兵」とは何かと調べ始めると意外とわからない。このうち賦兵の方は、賦役と関連させながら、徴兵に結びつけてゆくことが出来るが、壮兵となると、軍制史関係の研究書をひもといても、あまり明確なイメージをうる事が出来ない。



それはおそらく、この用語が使われていた当時から不明確さをうけつぐものであり、その不明確さは、制度の変化が同じ言葉に投影されて、その意味を重層化するといった事態に起因しているように思われる。「壮兵」は現在では士族志願兵などと注記されるように、士族兵と志願兵との意味を併せ持つ用語として理解されているが、研究書は徴兵制度のあとを追うに急であり、それに見合うどのような志願兵制度があったかを明らかにしないままに叙述を進めてしまっている。しかしこの問題をそう簡単に切り捨ててよいものであろうか。

壮兵制度廃止が明確にされるのは、明治八年二月九日の「全国壮兵漸ヲ以テ悉皆免役」の布告によつてであるが、この時存在していた壮兵は、大まかに云えば、①廃藩置県にあつて鎮台兵として再編された旧藩兵、②その後徴募された志願兵、という二種類の兵隊から成つていたように思われる。この②の志願兵は、①の形で発足した鎮台兵の補充・交代・拡張などのために募集されるものであり、明治五年春頃からその募集が始められている。そして①の兵隊は再生産されることなく、服役期限（東京鎮台三年）を付されているのであるから、この兵役制度による鎮台兵の実質は①↓②へと動いてゆくわけであり、壮兵とはこの①↓②の動きを含めた呼び方だったとみることができ。

ところでこの①↓②は、鎮台兵という意味では連続しているが、士族兵という共通性を持つのかということになるとなかなか問題であり、募集の対象を士族に限る場合よりも、「四民之内歩兵望之者」何名を精選せよといった指令が県に出される場合の方が一般的であつた。この募集方針は、士族を排撃するものではないが、やがては兵役志願者が四民（士農工商）全体に及ぶことを望ましいとする政策立案者の意図を示しており、この点でも壮兵の内実が士族から



四民への動きを含んでいたと云えよう。

従つてこの壮兵制は、徴兵制を両立しえないものと考えられていたわけでもなかった。徴兵令は明治六年春、東京鎮台管下から実施、翌七年大阪・名古屋鎮台というように、情勢をみながら施行区域を拡大する方針がとられ、壮兵制との混在状態があらわれるわけであるが、それは単に並存というだけではなく、徴兵の補充を壮兵によるという事例もあらわれている。そしてこうみてくると、さきの兵部卿権限にみられた「賦壮兵」の規定は、徴兵と志願兵の二本立てによる兵制の運用という構想を示したものでなかったかと思われてくるのである。

壮兵制の解消は、明治七年頃から応募者がなくなるといふ深刻な募集難におちいったことによるものであるが、この、立案者の予想をもこえたであろう壮兵制の急速な没落は、士族社会の解体とそれに代る国民社会の未成熟とでも云うべき事態が、廃藩置県後数年にして表面化してきたことを物語るものではあるまいか。

## 十三年のち

宇佐美 斉

学生時代は、まわりを山に囲まれた京都の閉鎖的な空間に、多少の息づるしさを感じていた。自然的立地条件だけでなく、そこに生活する人々のやや排他的に感じられる面にも、いくらか抵抗を覚えていた。今にして思えば、よそのの疎外感に加えて、観念を食べて生きているようなみずからの生活不在の生活を心のどこかで恥じ、それを何らかのかたちで精算したいと願う過剰な意識が、多分に作用していたのだろう。いずれにしても、修士課程を了えて阪神間



のある私立大学に就職して京都を離れた当座は、一種の解放感に似たものを味わった。六甲の展望台から夢幻的にひろがる港の夜景を眼下に見おろしていると、六年間の京都での学生生活がもたらした観念の自家中毒が、なにがなし癒されるようにさえ感じられた。

二年間のフランス留学をふくめて十三年間つとめたその大学を、思いがけなくもこの春退職して、人文科学研究所に籍を置くことになり、再び京都と深いつながりが生じた。転職の動機をここでうまく説明することは難しいが、ややもすると精神をもまどろませてしまう平穏と無事をあきたらなく思う気持が根づよく巣くっていて、それが変化と刺戟を求める *vagabondage*（ざすらいの性分）に拍車をかけたように思われる。研究条件への配慮や招いて下さった方々の御厚意が吸引力としてつよく働いたことは、今さら言うまでもないだろう。

ところで、かつてそれなりにひたすらな思いをもって人生の一時期を過したことのある空間に、今度は違った角度から別の立場で浸されることになったならば、ひとは単に懐旧の情にかられるだけではなく、外在的な現実空間と内在的な意識空間との断層あるはずのようなものに、驚かされずにはいられないのではないだろうか。とりわけ、物理的な空間としての京都はほかの都市にくらべてはるかに変化の少い町であるだけに、時の流れがもたらす意識空間の変化が、それだけ余計に際だって見えるように思われる。学生時代の思い出しみづいた界限を散歩したりしていると、時の流れの早さとそれなりの軌跡を描いて来たわが身の変化ばかりが、つよく意識される。ヴェルレーヌや中原中也の詩句ではないが、風景がお前は一体なにをして来たのか、そしてこれから先どこへ行くかとするのかと、ひそかに囁きかけてくるような気さえる。





## 講演

### 退官記念講演



五五年三月二日  
於 京 大 会 館

### 經濟史と政治史のあいだ

河 野 健 二

經濟史と政治史のあいだに、私は三つの問題領域を考へる。その一つは、經濟史と政治史の在り方の相互關連性である。この二つの次元は固有の運動法則にしたがつて変化しつつ、全体として補完的な關係に立っていると思ふ。

簡単に言えば、經濟構造の變化の仕方は、ある種の生産様式が支配的であつて一元的な構成をとる場合と、そうではなくて競争的な生産様式が併存して分裂的な構成をとる場合とのあいだの交替としてとらえられる。これに逆対応する形で、政治構造は變化する。すなわち、一元的な經濟構造の場合には、政治形態は弛緩し、あるいは分散的になり、封建的分權制や、資本主義下の議會制民主主義という形をとる。しかし、經濟構造が分裂し、多様化するときには、その分裂傾向を克服するために集權的政治機構が生まれてくる。絶対王政からファシズムにいたる「個人統治」のさまざまな形態、あるいは独裁制は、そういう狀況の產物である。

第二の問題領域は、從來、經濟構造のストレートな具體化として考へられてきた階級論とは別個に、社会集團の在り方を考へ、それを經濟と政治とをつなぐ具體的な契機として位置づける仕事である。身分制、官僚制、あるいは農民層や中間層の在り方といった事例を挙げることができる。革命や戦争といった歴史的な画期をなす事件は、單に生産様式の推移で説明することも、英雄物語りとして説明することも、いずれも適当でない。さまざまな制度や慣行を担う社会集團があり、その相互作用の結果として、大きな政治的決定が

導かれるのである。フランス革命における特権身分、ボナパルティズムにおける農民層、ファシズムにおける中間層、これらの社会集団の意識や動向に焦点を合わせた社会史的考察が必要である。中間層の動向こそが、政局を大きく変える要因である。

第三の問題領域は、社会思想の系列や類型を明確にして、以上の問題との対応を考えることである。社会思想を進歩と反動、右翼と左翼という工合に区別するのではなくて、問題意識と方法の上で異質な思想を区別する必要がある。私は感性にもとづく全体認識、または本質直観を得意としたルソーと、理性にもとづく

個別や多様性認識の立場をとったモンテスキューとの対比を考え、それぞれの政治論が「集権国家」「社会契約論」と「分権国家」「法の精神」に帰結したことを重要視する。この対比はマルクスとブルードンによって引きつがれ、さらに二〇世紀になるとマルクス主義そのものを相容れない両者に引き裂くにいたる。これらの事態が示していることは、思想は歴史的状况によって選びとられて、それぞれの役割を果たすことを求められるということである。それが思想の運命である。（より詳細な内容については、河野健二「経済史と政治史のあいだ」思想一九八〇年七月号を参照されたい）

#### お客さま

五四年一月一四日

中国社会科学院近代史研究所所长 劉大年氏

五五年二月六日

慶北大学総長 徐燾 珏氏

二月一日

北京大学教授 張光 珮氏

二月二日

中国社会科学院経済研究所研究員 英承 明氏

二月三日

廈門大学教授 傅衣 凌氏

二月二五日

中国天津南開大学日本史教授 俞辛 焯氏

五月一六日

Department of History School of Oriental & African Studies, London University

C. A. Curwen氏

五月二〇日

新亜研究所

全漢 昇氏

五月二六日

中国科学技术大学副学長

錢臨 照氏

講演「中国先秦時期物理学の成就着重討論」

《墨經》（科学史研究班）

五月二八日

中国西北大学學術視察団

郭琦、張 豈之、楊 春霖氏

五月三〇日

ケララ統計研究所（インド） N. T. Mathew氏

## 本のうわさ

### 飯沼二郎 『歴史のなかの風土』

(B6版、二八六頁、日本評論社)



私はこれまでに飯沼氏の著作を二冊よんでいる。ひとつは『農業革命論』であるが、本著の第一―四章はその延長線上にあり、古代世界における諸文明の生成が風土論的に記述される。農業についての専門的知識が歴史のそれと見事にまじり合った、簡潔にして明快な文明論であり、まさに氏の面目躍如といえよう。

さて、私がよんだもう一冊は『地主王政の構造』である。かつて一八世紀のイギリス政治史に取り組もうとしたとき、氏の地主王政論は私にとって大きな指針となった。本著ではその適用範囲について一部に修正がなされ、他方それをふまえたうえで江

戸幕府をもって絶対王政とみる見方が示されている。このような論点はいうまでもなく人文研におけるブルジョワ革命研究のなかから生まれたものである。以下、この点にたちいってみたい。

地主王政論は一八世紀のイギリスを具体的な根拠として、ブルジョワ革命以降の一定の時期に「半封建的」なものが「残存」する段階を設定し、それによって大塚史学のブルジョワ革命神話を批判しようとするものである。氏の論証の細部、例えばマニエフアクチュア論や一九世紀イギリス政治史の見方等には私は疑問を抱くが、大筋ではなお有効な歴史概念だとおもう。しかし

ながら、問題は一八一―一九世紀の特殊イギリスの権力形態であるジェントリー体制をどこまで普遍化できるかということである。大塚史学のモデル主義を批判されながら氏自身、イギリス史の特殊なありように十分な注意を払わぬままに、この体制を普遍化し、モデル化しておられるのではなからうか。その結果、仏、独、日等の「後進資本主義国」におけるその地主王政のゆがみが強調されることになり、そしてそのゆがみの故にこれら三者の地主王政はいずれも「敗戦」によって終結したという、かなり強引な解釈もでてくることになった。また、江戸幕府を絶対王政とみるのも明治政府を絶対王政とする論と同様に西洋のモデル、ないしはマルクス主義的な段階論に余りにとらわれておられるのではなからうか。

以上の論点は勿論、かつての飯沼氏の大塚史学批判の意義をいささかも減ずるものではない。ただ、ポスト大塚史学時代（少くともイギリス史に関しては大塚史学は氏の想定されるほどの力を現在もっているとおもえない）のなかにおかれ、そして西洋史研究の混沌状態を眼の当りにする者にとっては氏を含むかつての人文研の一連の

大塚史学批判の作業そのものについても、それを突き離してとらえ直さざるをえない

い、そうした学問状況にあるということである。  
(見市 雅俊)

## 上田 篤『くるまは弱者のもの』

(新書判、二〇三頁、中央公論社)

最初に標題を見て、とうとう出るべきものが出たと、内心、快哉をさげんだ。今日の車社会では、歩行者優先、自転車車の保護などが主唱され、車を運転している者は、何となく肩身の狭い思いをしなければならぬ。ドライバーこそ、精神的には「弱者」の立場であると、車好きな私などは思っていた。本書は、日頃小さくなってハンドルを握っている私のような者をなぐさめ、はげますことを目的として書かれたものだ、と信じて疑わなかったのである。しかし読み進んでいくうち、本書が言う弱者は、家庭の主婦のことであり、私のような者は、およそ車をもつべきものではないことを思い知らされ、ますます暗い気持ちになってしまった。

本書で述べられていることのうち、ある

部分は全く同感であり、又より多くは賛成しかねる。パイパス建設の無益さ、自動車道路としてはパイパス型よりクラスター型にすべきであるという本書は、説得力があり、それが実現されればどれ程、便利であり、生活環境も快適だろう。「実現されれば」ということは、「ツボグルマ」に関しても同様である。最近の車の需要は、スポーツカーからワゴンやミニバス（九人乗りレジャーカー）のようなものに傾きつつあると聞く。生活空間としての車の利用の典型的な形として、著者が主唱する「ツボグルマ」も、現実の姿をみてみたいと思う。しかし、車を主婦のものとする主張、これは無条件に賛成するわけにはいかない。何故だかわからないが、急に方向転換したり、停車したり、狭い道を対向車のことを

無視して運転したり、つまり自分の走行のことしか考えないドライバーは、きまって女性、とりわけ主婦に多いことを日頃、実感させられる。最近、主婦の間で爆発的に流行しているミニバイクの事故が、急増していることは、私の実感が確かなものであることを証明してくれるであろう。

こういうことを言うときに、女性差別だと攻撃されるだろうが、こと車に関して、いくら非難・攻撃されてもかまわない。簡単な車の修理（パンク修理・プラグ交換）も知らず、運転技術を向上させようという努力もなしに、ただ便利だからといってハンドルを握り、結果、事故を起こさずには、被害者はたまったものではない。走る凶器である車を扱う為には、又事故はいくら注意しても起る以上、やはり車の運転には、それなりの研究、努力がいると言える。その研究、努力を今日の主婦がどれ程しているのだろうか。少くとも私には、はなはだ疑問である。もっとも主婦に限らず、若い男のうちに、ぼおーっと運転している者がいるが。そこで私は次のことを提案したい。免許更新時に再度、運転能力の試験をし、それは段階的に厳しくしてい

く。不合格者は、教習所で初歩からやり直す。同時に過去の違反のチェック、暴走族の防止をはかる。こういうことが行なわ

れた後であれば、主婦が弱者であり、便利さ故に車は主婦のものとする主旨には、大賛成である。

(富谷 至)

## 多田道太郎『日本語の作法』

(B6版 二二九頁、潮出版社)

ここ数年、日本語の乱れを嘆く声が高い。しかし、著者は日本語の現状や未来を悲観してはおられない。むしろ楽観的である。

例えば外来語の流行について、片仮名の度

を過した使用を戒めながら、「動詞の健在な

なかり、日本語の将来に不安はない」と

言われる。つまり、語彙のうえでいかに外

来語の侵入を許そうとも、日本語の要である

動詞は外国語化されない。「トライ」と

いう英語も、日本語の中では「トライする」

と日本語化されて初めて使用できる。要が

強固である以上、日本語は本質的に変化し

ないと考えられるのである。ここで動詞以

外の要素も考えてみると、例えば外来の形

容詞も同様に日本語化されるように思われ

る。例えば「ハード」という英語は、「ハ

ード・スケジュール」などと使用されるも

の、より日本語的な表現の中では、「ハ

ードな日程」と日本語化されなければならない

まい。

以上、外来語の日本語化を第一に取上げ

た理由は、本書に一貫している著者の日本

語に対する信頼の大きさを指摘したかった

からである。日本語を論じる場合、ともす

ればそのマイナス面にのみ目を奪われ、外

国語(とりわけ西欧語)をより優秀な言語

であると考える傾向もあるが、西欧の言語

や文化に詳しい著者から日本語の真の良さ

を教えられ、私は嬉しかった。

さて、言語が人間の思想や感情を語ると

いう機能を有する以上、それらを育む社会

や文化と無縁ではありえない。著者の眼は

常に日本語の根底にある日本文化に向けら

れている。そのうち最も印象に残ったのは

「察しの文化」という言葉である。私達は

話をする場合、相手の立場を察して言葉遣

いに気を配る(著者は触れておられないが、

「敬して遠ざける」式の敬語が流行る背後

に、察しのつかない相手と会話する機会が

増えてきた現代社会の影響を考慮しても良

いのではないかとと思われる)。相手の立場

を察することは良い。しかし、私達は相手

が同様に自己の立場を察してくれることを、

無言のうちに強要しがちである。察しの文

化を共有する日本人同士の会話ならばさほ

ど問題になるまい。だが、国際社会の中で、

また利害関係が激しく衝突する場で、察し

の文化を身に染み込ませてしまった日本人

は、どんな作法で会話をすれば良いのか。

著者と同様に背筋を寒くしながら、外国の

友人を多く持たれる著者の続稿を、心から

希望する次第である。

(矢淵 孝良)



## 吉田光邦『技術文明と宗教—理性と感性のあいだ』

(B6版、一九〇頁、日本経済新聞社)

「あつ、あの絵もなにもない本ノ」この本を私が書評すると聞いて、思はず横山さんのもらした感想である。なるほど吉田先生の本というものは絵や写真が沢山でてくるのが常であつて、この本のように「絵もない」というのはやはり稀有な例であるのだろう。だがひとたびこの本を繙けば

「なにもない」どころの話ではない。ここには科学技術史の第一人者たる吉田先生の古今東西にわたるエンサイクロペディア的博識と、ゆるぎない信念につらぬかれた技術文明批評がある。

門外漢の私にはもとより先生の科学技術論を批評するなど力の及ぶところではない。その論法の快刀乱麻を断つ切れ味に、葵の御紋の前にたじろぎひれふす下賤の身よろしく、平身低頭ただく御説拝聴つかまつる以外にない。しかしこの名にし負う科学技術史の大家にしてかくも科学技術に批判

的たらざるを得ないとはいささか意外であつた。そして更に科学技術を乗り越えるに宗教をもつてせよと説くに至つては……。

「自然科学という新しいロゴス系が文明をリード」したためパトスの文化が危機に類しているというのが現代の状況であり、それゆゑ際立つてパトスの宗教が今日必要とされる、というのが先生の立論のおおまかな趣旨である。だが、そもそもロゴスとパトスはそれほど水解しがたい対立関係にあるのだろうか。美術や工芸の名品はまさにそのロゴスとパトスとの幸運な合体により生み出されたはずである。確かに現

代の技術革新はめざましいものがある。だが、そこに美を、パトスを認め得ないとしたら、それは美を、パトスを追求する者に、時代の先端をいく技術に拮抗する技量が、思想が欠けているからではあるまいか。時代の生産様式、科学技術に見合わない傑作が生まれたことは未だかつてなかったのではあるまいか。遠近法は単に絵画の技法であるのではなく当時の物理学の思想とも表裏一体であつたはずだ。

しかし現代の矛盾は深刻であり解決は容易ではない。先生の文章を楽しみつつも問題の重さに疲れた私には「放浪、遊牧の思想」「夏の旅から」と題された終りの二章が安らぎであつた。先生も漂泊の思いやまぬ御様子。どうぞバンディアミールの地に古への遊牧民の生活を偲びに行つて下さい。そこにはあの非人間的な科学技術もなく、こうるさい助手達もいないでしょうから。

(天野 史郎)

## 山田慶児編『中国の科学と科学者』

(B5版、七五三頁、人文科学研究所)

どうもついていない、という感が次第に深くなる。だいぶ前にさる先生の両書をひとつの所報にダブルで書評せよと命じられたことが頭から離れない。こんどのも、両書どころか……。七五三頁のうちに九人の執筆者がそれぞれの専門のところであらばつておられるのだから、これは九冊分だ。とても一冊とは思えない内容である。さきのは絵本で楽しく、掘り屋の常として図や写真をみることになれている者にとっては、けっこう楽しく読ませていただいたのだが、これは図はあるものの楽しみというには程遠い、堅いものばかりなのは当り前だが、息を抜くことがむずかしい。

山田慶児さんが中国科学史の共同研究班を組織されて、その成果をはじめて問われた。名づけて『中国の科学と科学者』と。その表題のつけ方の適切さ、うまさに、さすがといった印象。編者の、何気ない筆づかいの裏に歴史に対する深い観察がみえる「授時暦への道」をはじめとする論文集。ひとつのテーマ、たとえば以前のような「……時代の……」というテーマに何人かが共同して当り、各側面から実像にせまるという方法をとったものではない。自由に

テーマがえらばれた由。だから集った論文を三部立てにしてある。制度・人・思想と。田中淡「隋朝建築家の設計と考証」は制度にあるが、人に入りうる内容だし、天野元之助「後魏の賈思勰『齊民要術』の研究」などは、後魏賈思勰と限定してここに重点があるようだが、やはり内容は『齊民要術』にあるから、制度にはいつてもよいのだろう。勝村哲也「修文殿御覽天部の復元」や森村謙一「歴代綜合本草書における植物新入品目の考察」も、どう読ませていただいても、思想とはおもえなかった。

山田さんはたとえがうまい。中国科学史の研究対象を森とされた。ここに生息する生物のコミュニティや無機的環境をふくめた生態系をあきらかにする必要をいわれ、「科学史を人間的活動の一分野の歴史、さまざまな人間的活動に支えられた、それと交錯しながらも、なおそこに自律的な展開の契機を見出してゆく活動の歴史」と規定された。そういう方向が少くともこの報告によつて示されたものといえるだろう。そしてこの森が、随分に広々としていることが、勝村論文や小南一郎「魏晉時代の神仙思想」を含めたとき、はつきりしてくる。なお山

田さんは、みずす書房から『授時暦の道』を別に公刊されている。

(桑山 正進)

#### 東洋学文献センター

昭和五五年度

漢籍担当職員講習会

第一日(五月一二日)

中国の書物

参考図書・書誌解題

第二日(五月一三日)

漢籍整理法

経部書

第三日(五月一四日)

子部書

集部書

第四日(五月一五日)

新学書

書庫見学・実習

第五日(五月一六日)

史部書

実習

第六日(五月一七日)

討議、情報交換

平岡 武夫  
竺沙 雅章

倉田淳之助  
池田 秀三

市原 亨吉  
都留 春雄

狭間 直樹  
尾崎雄二郎

永田 英正

尾崎雄二郎

# 『弁正論』の会読

——隋唐時代の道教と仏教班——

創立五十周年を記念して出版された『人文科学研究所五十年』は、本誌「本のうわさ」欄には登場しないようであるが、そこには、東大部の歴史において共同研究室の果たしてきた重要性が強調され、六研究室のそれぞれの特色が描きわけられている。日本部・西洋部での共同研究の推進にあたって、環境づくりに多大の貢献をなしたであろうと想像される、所内の談話室や、街の喫茶店・バーの欄が設けられていないのは惜まれるが、それはさておき、東大部の宗教研究室についていえば、開所以来、研究室のぬしとして中国仏教史の研究に輝かしい業績を挙げてこられた塚本善隆先生が逝去されるという悲報に接したのは、一月末のことであった。京大との合併後、東大部の六共同研究室のうち、宗教研究室だけは、認知された研究部門のないままに研究活動をつづけてきた。そして塚本先生が在職中から待ち望んでおられた、宗教史研究部門の新設内定の朗報は、ついに生前には間に合わず、本葬の際の河野健二所長の弔辞のなかで披露されたのであった。

塚本先生は、一九六一年二月に研究所を定年退官され

るにあたって、『魏書釈老志の研究』をまとめられた。その中心をなすのは、魏書釈老志の訳注であり、先年刊行された『塚本善隆著作集』全七巻の第一巻がそれにあたる。釈老志の本文そのものが「釈」にくわしく「老」に疎略で、その割合は三対一であるが、訳注本では六対一となり、仏教の部分が、道教の部分に比べて二倍の詳しさになっていた。これは、僧籍に身をおかれた塚本先生ご自身の性癖のなせるわざというよりも、それまで宗教研究室にどうやってきた内外の研究者全体の関心の体现だったのである。

長年にわたり、『弘明集』と『広弘明集』すなわち南北朝隋唐時代における仏教護法の論文選、の綿密な会読を軸としてすすめられてきた、宗教研究室にかかわる共同研究も、昨年春以降、ようやく方向転換が企図されるに至った。柳田聖山班長の「禪の文化」班とともに、福永光司班長による三年期限の「隋唐時代の道教と仏教」班が発足したのである。道教と仏教班では、かの親鸞が主著『教行信証』化身土巻で、道教に対する護法の論文として注目し、異例ともいえる長文の引用を行なった、釈法琳『弁正論』の会読をすすめるかたわら、道教一元論者と目されることの多い福永班長による、道教史研究のガイダンスがしばしば講ぜられている。そして今年末からは、『弁正論』から一步すすめて、唐の道士・孟安



排『道教義枢』などの、道藏所収の文献の会説と共同討論に移る予定がたてられている。  
(磯波 護)

## モンテスキューを憶う

——モンテスキュー研究班——

わが国初の衆参ダブル選挙は自民庄勝のうちに終わり、これに味をしめたものか、三年後にも二匹目のドジョウをねらう向きがある、との風説も流れている。かくては、かねてから進行中の参院の衆院化はトメドなく……。ここ一年ほどつきあっているモンテスキュー氏は地下にあつて、どう見ていることか、などと想像をたかましようしたくもなる。

案外アッケラカンとしているやも知れぬ。貴族のない二院制など、推奨したおぼえはない。かの三権分立とても、イギリス以外に移植できると書いたおぼえもない、と後人の誤解に尻をもちこんで、すましていようか。

いや、それとも——一世紀後のヘーゲルよろしく、存在するものにはソレナリの理由あり、と頭をひねったウル法社会学者にふさわしく、クリマ(風土)といった「自然的原因」、法のほかに宗教や習俗・生活様式も含む「精神的原因」、さらにはこの双方から成る「一般精神」に思いをいたして、五五年体制のしかるべき所以、したがっ

て、五五年体制の息の根が止まりそうで止まらぬ所以についても、一説を開陳しそうでもある。

ことほどきようにモンテスキュー氏の眼くばりは古今東西を問わず、四方八方に及んでおり、未来をも見通していたのではないか、とこうしたざれごとを弄したくなるのである。

だが、その眼くばりにもどこか盲点があつたようだ。共同研究をはじめた一年前にも気づいたことなのだが、オリエントやイスラム文明については誤解が少なくないし、資料蒐集旅行の日程にベルリン行きをみこんでいない。

最近になって気がついたことというと、ピレネ山脈を越えるだけでいいスペインに足を伸ばさず、彼の経済観も、自分が経営するブドウ園や酒造りにかたよったゆがみを避けられなかつたようだ。モンテスキュー氏には、どうやら見ても見えなかつたものや、もともと見たくもなかつたものがかなりあつたようなのだ。

こうした盲点や偏向を考えにいれた「視野構造」とでもよぶるものが、モンテスキューにあっては——眼くばりがきいていただけに——とりわけ問題なのではないか。そして、この「視野構造」の分析のテストケースは、彼が自国以外ではもつとも長く滞在したイギリスによって与えられるのではないか。このカンが当たるかはずれるか、それが問題だ。(樋口 謹一、一九八〇・六・三〇記)

## 旅

### 北京一ヶ月留学記

小野 和子

気温零度、早春というにはまだまだ寒さのきびしい北京新空港に降り立ったのは、三月十二日であった。中文の大学院生阿辻哲次君と二人、北京に一ヶ月滞在し、図書館通いをするというのが目的である。これは永年来、京都の日中学術交流懇談会が、中国側に実現方を要望してきたことであった。

空港で北京語言学院の留学生宿舍に向う阿辻君と別れ、私ひとり、外城の北緯飯店という小さなホテルに入る。残念なことに社会科学学院は目下工事中で、図書室は閉鎖されており、こちらから申出た資料をわざわざホテルまで運んで下さって恐縮する。

「快相」というスピード写真を撮影してもらって北京図書館に閲覧願を出し、許可がおりたのは四、五日あとのこと、今度は、これも工事中の北京図書館善本室に通

いはじめた。往復はバスである。「メイ・ピヤオア、マイピヤオ」（切符のない方はどうぞ）という車掌の独特の調子にも耳なれてくると、バス通勤もかえって楽しい。回数も多く、路線も数あって、北京のバスはけっこう便利な乗り物であることに気がついた。北海で下車し、冷い風も肌に心地よく、白いラマ塔を仰ぎつつ金鯢玉竦橋を渡ってゆくと、やはり北京だなあという思いがしきりにしたものである。

善本室は午前八時半から四時半まで、昼間二時間の休憩がある。食事は最初のうちはホテルまで帰ったが、慣れてくるとその辺の食堂がやはりおいしくて且つ安い。お茶がわりにコップ一杯十七円（日本円）のビールを注文するのだが、何しろくみおきのビールだから気が抜けておいしくもない代り、アルコール度が低く昼からの仕事に差支えることもない。テーブルにつくと誰かれとなく話かけられ、きつと香港から来たのだろうとか、いや南方人にちがいないという調子である。食事がすむとそのあたりをいきあたりばつたりに歩いてみる。北海西北側には、かつての恭王府など清朝の王府の跡があり、私の住む下町とは異った白壁の明るさと空間のひろがりがある。什殺海の方に出ると、ここには自由市場があつて生きた鶏や紅い大根が売られている。その先には鼓楼と鐘楼が建つ。この附近は、旧い北京の面影がもつとも色

こく残っているところである。こうして北京の一ヶ月はあつという間に過ぎてしまった。貴重な資料がみられたこともさることながら、街のたたずまいやごく普通の市民生活の一端にふれ得たことも、今度の旅の大きな収獲であつた。なお参考までに収支決算を報告しておく、ホテルは一日二千円弱、一ヶ月五万七千円、食費もほぼ同額で、しめて十一万円也、東京に出張するのに比べてもはるかに安上りであつた。

## バツフオード・アルボリータム

横山俊夫

このところ、模倣ということを考えている。このことばにくりかえしこめられてきた否定の意味が気になるのである。ひとの真似はだめ、という考えは、古くシャーマンのあいだに同業者あらそいがあつたところにさかのぼるのか？しかし、その長い歴史のわりに、人類はヴァラエティを生みだすより、むしろ似たものばかりにまとまってきたといつてよい。ひるがえってひとびとのいとなみのなかでドダイ模倣でないものなぞあろうか、とも考えてみる。



“ワイルド・ガーデン”の一隅

イングラッド西方の丘陵地、コッツウォルドの北のには、モートン・イン・マーシュとバートン・オン・ザ・ヒルの両集落がならんでいる。それをむすぶ街道のなかほどに、バッツフォード・パークなる荘園の門が開いている。車を入れて五分ほどはしらせると、館をかこむ庭の脇につく。この地所のかつてのあるじは、樹木の珍種を国の内外にもとめ、とりわけ竹をめぐることで、前世紀末のヨーロッパで屈指といわれたものだ。

この人物がたえず気にしていたことがあった。ひとびとが、この庭をさして「ジャパニイズ・ガーデン」と呼ぶことである。没後、友人エドモンド・ゴスの手で編まれた自筆回顧録の補遺で、この人物は自分の庭は日本庭園ではないと力説している。彼によれば、日本庭園は神秘にみち、それに精通したひとにのみ多くをかたりかける。それは自然に対して極力人工をくわえることとなり、たっているものだといっているのである。

さてこの庭に足をふみ入れる。いまの所有者はタバコ王ダルバートン卿にかわっているが、多くの木々は一八八〇年代にさかのぼる。ハンカチーフ・トリ、メイデン・ヘア、ドーン・レッドウッド……小流に沿うて下った径がやがてのぼりはじめ、竹や泰山木の林をぬい、土地の蜂蜜色の石でできた館のわきをぬけ、秋咲きの桜、銅色樺の下につづく。木かげから日本の青銅の鹿がのぞ

く。丘を一巡して庭師の茅葺の山荘にいたる。うら手から小径が湿った森の中へ通じている。日本クルミの大木。

森のはずれに、東大寺二月堂を思わせるカーブをもった瓦屋根のあずまやが朽ちていた。玄関には王微之の「此君」の詩とおぼしき額。すこしはなれて、人の背丈ほどの日本の青銅仏が、眼下に広がるモートンの谷に對坐していた。格のトゲに氣をくばりながら庭の奥まったところにすすむと、暗く澄んだ泉がある。このあたりに竹の密林があり、あるじが時に自らこの庭を「ワイルド・ガーデン」と呼んでいたのが思い出される。そこから少し下ると、青銅の唐獅子が七宝の地球に爪をたてていた。ふたたびあかるい芝の斜面に出ると、カリフォルニアの巨木ウェリントンニアが視線をのばせてくれる。

一巡して二時間ほどであった。あるじはその回顧録でいったものだ。竹や石灯籠を配しても日本庭園にはならない。われわれは彼らを模倣してはならない。もしすれば、それは彼らを茶化す（パロディ）だけである、と。

では、この人物にとって、これらの異国ものを配した庭とは何であったのか。ヨーロッパの政治家や芸術家たちと幅広く交遊したこの人の晩年は存外孤独であった。耳がしだいに遠くなったことに加えて、その親友たちがみな自分より年うえであったため、次つぎと先だたれてしまったのである。彼はマックス・ミュラーをおして、

釈迦の世界に導かれ、自分の庭を釈迦が竹林中にひらいた最初の道場にちなんで「マイ・ヴェルヴァーナ」と呼んだ。

ベルトラム・ミットフォードすなわちリーズデール卿と私のつきあいは四年ばかりになった。彼は幕末・明治初頭に江戸の英国公使館にあった。その後二度訪日しているが、開化日本の西洋模倣を憎んだ。ギルバート&サリヴァンの『ザ・ミカド』のバロディづくりにも手を加した。しかし彼の庭として模倣の要素が皆無とはいえない。ただ彼にいわせると、園中の品々は、くったくない青年の日々の友人たちの亡霊をよびよせてたわむれるようにすぎない、という。これが「コレクターの狂気の、主たる正気の部分」と彼は述べている。ものあつめとは、模倣をさける精神がゆきつくところか？

バツフォードを訪れたのは昨秋帰国するまぎわのことであつた。この春の旅は、シェフィールドで開かれた英国日本学会の総会中、日英間の相互イメーじと題するシンポジウムに参加するのが目的であつた。席上、いずれも模倣ということに過敏であつたミットフォードと村田文夫をならべて論じてみた。いまその報告書が印刷中であるので、ここではふれない。会議のあと、最近大英図書館に入つたマクミラン社の文書をひもといた。ミットフォードの著作のいくつか、この出版社から出てい

るのである。ゴスもいつているように、彼の人生には自ら語らぬところが多い。孫娘たちはにぎやかに小説をかいているのだが。いま私は彼のエピソードや、彼が住まつたところの風景などをあつめ歩いて、その空白をうめている。

## ヨーロッパの土俗信仰

山下正男

こんどのヨーロッパへの旅は三回目であり、しかも文部省派遣ということであるから、観光的场所へは全然立ちよらなかつた。もっぱらミュンヘンにあるバイエルン州立図書館の古文書室とミュンヘン大学グラーブマン中世哲学研究所で時を過ごしたが、土曜日曜は南ドイツの各地方の巡礼教会と古城とをしらみつぶしに歩いてまわつた。

古城の方は事前の勉強不足で、ただみてまわつたというだけであつたが、巡礼教会の方はいちおうの下調べをしておいたうえで、実地でも十分観察調査することができた。調査の対象にした巡礼地は南ドイツで二十箇所ほどであつたが、同一地域のことゆえ、かなり一般的な結

さて、そうしたドイツの巡礼教会で、よく注意してみ  
ると、マリアや諸聖人の像の足もとに、手紙や折りたたま  
れた紙きれが供えてあるのに気付く。それをそつとのぞ  
き読みしてみると、そこにありとあらゆるお願いごとが  
書き込まれている。たとえば「マリア様、私の夫をアル  
コール中毒からお救い下さい」、「私の息子が家出しまし  
たが、一日も早く帰るようお願いします」、「私の父の  
病気が早くなおりますように」といったもの、またたど  
たどしい小学生の手で、「学校の成績がよくなりますよ  
うに」、「試験がうまくいきますようにお助け下さい」と  
いったもの等々がある。

つぎに気がつくものは、奉献物 (Votivgabe) および奉献画 (Votivmal) である。これは信者のお願いがかなったときにお礼として教会に捧げるものである。というのも、始めにお願ひするときに、願ひがかなえられたら、しかじかのお礼を捧げますとマリアなり聖者なりに約束するからで、願ひがかなえられた場合は必ず約束を果さねばならないのである。奉献物には、銀やブリキのプレートに足や手や目や胃、腸などの形を浮き出させたものが多い。これは手や足などの病気がなおったときに捧げるものである。また奉献画は稚拙ではあるが宗教的感懐のこもった油絵であり、板の上に描かれている。そ



してたとえば木こりが木の下敷きになっている絵、子供が階段からころがり落ちてゐる絵、戦争で爆撃されている絵、病気で苦しんでいる絵がある。そしてこれらはもちろん、そうした災難から無事救われたということを示すものである。こうした習慣は、南ドイツだけでなく、フランス、イタリア、ギリシア（ここはギリシア正教の国）でもみられるものであり、それらの国のものも、南ドイツと比較する意味で、帰国の途中に立ちより短期間ではあるが調査することができた。



### 感銘を受けた本（五十音順）

- 飯沼二郎 金達寿『対馬まで』

河出書房新社  
姜在彦『朝鮮の開化思想』 岩波書店

- 宇佐見斉 河盛好蔵『パリの憂愁——ボード

レールとその時代』 河出書房新社

- 樋口謹一 鶴見俊輔『太夫才蔵伝』 平凡社

- 見市雅俊 C・アウエンハント『鯨絵』 せりか書房

水谷慶二『知られざる古代』

日本放送協会出版会

黒岩 健『登山の黎明』 ペリかん社

フェリーチエ『ファシズムを語る』

ミネルヴァ書房

- 山下正男 中川久定『デイドローの「セネカ論」』

岩波書店

マコーレイ『キャッスル』 岩波書店

トーピッチュ『イデオロギーと科

学の間』

未来社

- 吉川忠夫 広川洋一『プラトンの学園アカデ

ミア』

岩波書店

小島祐馬『古代中国研究』 筑摩書房

## 訃報と叙勲

○塚本善隆名誉教授は、銀杯一組を賜り、正四位に叙せられた（五五年一月三〇日）。

○また同名名誉教授は特旨を以って位一級追陞せられた（五五年二月二二日）。

○吉川幸次郎名誉教授は五五年四月八日逝去された。

○同名名誉教授は従三位勲一等に叙せられ、瑞宝章を授けられた（五五年五月二日）。

## おくりもの

一九七九年度の人文科学協会助成金は、次の二氏におくられ、三月二六日に人文科学研究所において受賞式がおこわれた。

### 1 清水 隆久氏

清水隆久氏は大正一五年石川県に生まれ、日本大学文学部を卒業され、現在石川県七尾農業高校の校長です。氏は多年、北陸地方の地方史とくに農書の研究に専念し、と

くに『農業遺書』の発見と研究と複製（『近世北陸農業技術史』の書名で刊行されました）は高く評価されています。最近では能登の豪農、村松標左衛門の研究にうちこんでおられ、既にその研究の一部として同氏の著書『村松家訓』を複製（『富来町史』所収）、次いで同氏の著書『農業開闢志』の研究に没頭しておられます。大学等の研究機関の外にあって、長年地方史の研究に従事し、すぐれた成果をあげつつある清水氏に人文科学賞を贈ることは、賞の性格からいってきわめて適当であると思われます。

### 2 宇高 莒夫（随生）氏

宇高莒夫（随生）氏は一九〇九年、京都に生れのち満鉄に勤務、戦後帰郷、京都に住んだ。その後祖父にあたる土佐の生んだ異色の画人、河田小龍を中心とする近代史研究に手を染め、六六年、別府江邸の著「画人、河田小龍」の編集を行ない、一文を記した。また明治十八年起工の琵琶湖疏水工事の記録図作製は河田小龍に委嘱され、十三冊の写生帳が残された。氏はこれにより「琵琶湖疏水図誌」の刊行を計画七八年

に完成し、みずからも「河田小龍小伝」の論文を寄せた。さらに小龍が中浜万次郎の漂流談を記録した「漂異紀畧」の書誌的研究を進め「土佐史談」にその一部を発表、現在の校訂本と研究を準備しつつある。

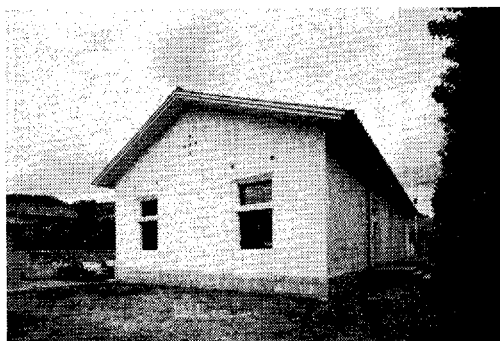
七九年には「写真事始め」と題する一本を刊行したが、これは日本写真史に新しい事実を添えたものである。従来日本写真史は上野彦馬、下岡蓮枝のグループのみがとりあげられてきたが、氏は日本近代の写真技術の導入はさらに多元的であることを解明し、その一例として京都の大阪屋堀与兵衛の事績を詳細に解明した。ことに慶応年間の薬方書また売上帳の発見によって柳河春三の「写真鏡図説」以前の薬方が知られたことは特筆される。氏は現在も熱心に研究を続行中であり、この全たく独力で進められている近代史研究にささやかな助力のあることが望まれる。



## 建 築

### ○資料収蔵庫竣工被露

分館ガレージ跡に建築中の資料収蔵庫が、このほど完成し、五月二二日（木）午後四時より同収蔵庫において、沢田総長をはじめ学内関係者、工事関係者等約四十名の臨席を得て竣工被露が行われた。



この資料収蔵庫は、鉄筋コンクリート造、平家建、面積二三一平米で、屋根を分館と同様にスパニッシュ風瓦葺にまとめた瀟洒な建物である。

収蔵する資料等は、イラン・アフガニスタン・パキスタン・インドの考古資料、地理民族資料、古地図、影照本等約二八万点を予定している。

### 人のうごき

○河野健二教授（西洋部）は停年退官（四月一日付）。後任所長として福永光司教授（東方部）が就任。

○樋口謹一助教授（西洋部）は教授に昇任。  
○宇佐美斉（関西学院大文学部助教授）氏を助教授（西洋部）に採用。

○池田秀三助手（附属東洋学文献センター）は、文学部助教授に昇任。

○深沢一幸助手（東方部）は、大阪大学言語文化部講師に昇任。

○岩熊幸男氏を助手（西洋部）に採用。

○杉本俊宏・井上章一両氏を助手（日本部）に採用。

○矢淵孝良・宮崎法子両氏を助手（東方部）に採用。

○飯沼二郎教授（日本部）は、五四年一月二六日成田発、アテネ市内、エルサレム、ローマ近郊等で、農業調査及び資料収集を終え、五五年一月四日帰国。

○古田光邦教授（日本部）は、五五年三月七日成田発、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館、現代美術研究所で日本のデザインに関する講演及び資料収集を終え、同月二〇日帰国。

○森時彦助手（東方部）は、四川大学より二月一七日帰国、再度、三月一三日伊丹発、四川大学で中国の歴史・文化を研究し、五六年三月三一日帰国予定。

○横山俊夫助手（日本部）は、四月七日成田発、シェフィールド大学で一九八〇年度英国日本学会年次総会に出席し、スコットランド国立図書館・大英博物館で日英史に関する資料収集をし、同月二二日帰国。

○福永光司教授（東方部）は、四月三〇日成田発、パリ第七大学で唐代の道教と仏教に関する講演及び研究をし、六月四日

（二八頁につづく）

# 書いたもの一覧

一九七九年二月  
 一九八〇年五月  
 (五十音順、●印は単行本)

・飛鳥井 雅道

伊藤整と小林多喜二(上)

維新史における坂本龍馬の役割

マイ・ホーム論

和宮東下と中山道

司馬遼太郎

司馬遼太郎と幕末・維新

鷗外・漱石と日本の近代(座談会)

鷗外・漱石・研究史から

芸術の自立性

荒井 健

李義山詩集小考

飯沼 二郎

むら文化と私(農具) 一―五

農業再建への提言

日本農法の提唱

新しい契約

市民運動と農業問題の根底にあるもの

月刊チャペル・アワト 八八号 三月

文学 一二月

歴史読本 一二月

歴史公論 一二月

維新の道 一月

朝日ジャーナル 三月二五日

カイエ 三月

歴史公論 四月

歴史公論 四月

『桑原武夫集』第一巻月報 四月

東方学報 五二冊 三月

公明新聞 一月一日―三十一日

農業技術研究 一月号

畑地農業 二五五号 二月

共助 三月号

人工授精と民主主義

食糧と国民経済

書評・東畑四郎『昭和農政談』

・上山 春平

●哲学の旅から

古事記と神祇革命

・宇佐美 斉

書評・北川透著『詩的火線』および『詩的弾道』(同時代

覚書、上、下)

フランス散文詩の成立について

『研究論文集』(関西学院大学文学部フランス文学研究室)

清水昶の三つの空間『新選清水昶詩集』解説

思潮社 二月

書評・栗津則雄著『ランボオの生成』

現代詩手帖(思潮社) 三月号

・梅原 郁

宋代の恩蔭制度

・江村 治樹

東方学報 五二冊 三月



春秋戦国時代の銅戈・戟の編年と銘文

・太田 武男

民法「家族法」

最近における公正証書遺言の実態

・小野 和子

東林党考(一) 淮撫李三才をめぐる

・勝村 哲也

玄奘の訳経事業(『中国仏教の旅1』)

・佐々木 克

大久保利通

勝者と敗者の美意識

抵抗の様式

・竹内 実

中野重治と中国

倪雲林の画と詩(上中下)

中国における人間の要素

八〇年代のゆくえ・中国

統計と白髪三千丈

一枚の名刺

映画「天平の薨」をめぐる

中国文学の波と声

中国現代文学史の註

吉川幸次郎先生を哭す

東方学報 五二冊 三月

法学セミナー増刊 四月

公証 五六号 五月

東方学報 五二冊 三月

美乃美 四月

高校通信東書日本史・世界史 一二月

歴史と旅 二月号 二月

季刊直 一〇号 三月

新日本文学 一二月号

グラフィック茶道 一二・二月号

中央公論 一月号

世界週報 一月一日号

京都新聞 一二月二六日

京都新聞 二月六日

京都新聞 三月一三日

アジア・クォーターリー 二・三月合併号

同右

毎日新聞 四月一日

・多田 道太郎

◎日分学

風俗カルテ

文章の作法Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ

日本人と書齋(価値ある情報別冊『書齋の復活』)

ダイヤモンド社 四月

解説・小松左京著『明日の明日の夢の果て』 角川文庫 五月

あそびと創造 小原流挿花 六月

・田中 淡

中国建築と博 装飾タイル研究 五号 一二月

◎日本建築学会編『建築学便覧1計画』

(六篇歴史) 日本・中世1・2、中国・全 丸善 三月

先秦時代宮室建築序説 東方学報 五二冊 三月

中国仏教建築の黎明(『中国仏教の旅1』) 美乃美 四月

南禅寺(同右) 四月

建築―外来様式の受容と拒絶(『週刊朝日百科世界の美術』)

一二二号・鎌倉時代の美術Ⅰ 朝日新聞社 五月

・谷 泰

「知・無知・意識・無意識」講座二〇世紀―知る

平凡社 四月

雲の中を歩んではならない

『桑原武夫集』第一巻月報 岩波書店 四月

(共著) The pastoral Life of the Durrani Pashun Nomads

in Northeastern Afghanistan. in preliminary Report

of Field Survey for Comparative Studies on the  
Agrico-pastoral peoples in Southwestern Eurasia. Re-  
search Institute for Humanistic Studies. 五月

(共著) Man-Sheep Relationship in the Flock Management  
Technics among North Capathan Shepherds. In pre-  
liminary Report of Field Survey for Comparative  
Studies on the Agrico-pastoral peoples in South-  
western Eurasia. Research Institute for Humanistic  
Studies. 五月

・礪波 護

隋唐時代の太倉と含嘉倉 東方学報 五二冊 三月

太倉と含嘉倉(『中国聚落史の研究』) 唐代史研究会 三月

・中村 賢二郎

書評・栗原福也外編『ヨーロッパ経済・社会・文化』

史学雑誌八九編一号 一月

カルヴィニズムと資本主義 人類の知的遺産月報二五号 四月

・狭間 直樹

中華民国第一回国会選挙における国民党の勝利について

東方学報 五二冊 三月

・林 巳奈夫

『周礼』の六尊六彝と考古学遺物 東方学報 五二冊 三月

・樋口 謹一

吉川英治と「宮本武蔵」

『吉川英治全集』第一五巻 解説 講談社 二月

「宮本武蔵」の人生観 同第一六巻 解説 講談社 三月

さきさなな武蔵

同第一七巻 解説 講談社 四月

「宮本武蔵」と現代

同第一八巻 解説 講談社 五月

・福水 光司

日本人とは何か

アイ・ビー・エム「天城シンポジウム」記録 三月

顔真卿の書芸術と道教

書学 三六〇号 三月

中国哲学における個と衆

高崎哲学堂「講演要旨」一五集 四月

仏教訪中代表団と道教

日中仏教 一四号 四月

●大塩中斎『洗心洞割記』校注 岩波『日本思想大系』46 五月

・松井 健

バタン島の民族植物学——エスノ・サイエンスの比較研究に

むけて——(黒潮文化の会編『黒潮の氏族・文化・言語』

角川書店 二月

パシエトゥン遊牧民の牧畜生活——北東アフガニスタンに

おけるドゥラン系パシエトゥン族調査報告——

京都大学人文科学研究所調査報告 三三三三 三月

聖教新聞 三月

アフガン遊牧民の生活 談叢近代日本関係洋書(一)(共著) 人文学報 四八号 三月

The Pastoral Life of the Durrani Pashtun Nomads in

Northeastern Afghanistan. In Y. Tani (ed.) Prelimi-

nary Report of Comparative Studies on the Agrico-

Pastoral Peoples in Southwestern Eurasia 1978,

Research Group for Comparative Studies on the

AgriCo-Pastoral Peoples in Southwestern Eurasia,  
Research Institute for the Humanistic Studies, Kyoto  
University, pp. 1-31. (共著) 三月

・御牧克己  
チベット語仏典について

『続・シルクロードと仏教文化』(樋口隆康編) 四月  
antaraloka にいて 印度学仏教学研究 第二八巻 第二号

・柳田聖山  
今月のことば 花園 二月—五月  
同右 二月—五月

・禅語コーナー  
禅林象器箋、葛藤語箋、禅林句集并苗(禅学叢書之九) 編集  
中文出版社刊 十二月

只管打坐—道元 N H K 学校放送第三学期 一月  
鈴の声—恩師久松真一先生の死 毎日新聞五日号 三月

虚堂下獄の真相—中世漂泊その八 禅文化九六号 三月  
絶観論とその時代—敦煌の禅籍 東方学報 五二冊 三月

景德伝灯録第二九・三〇巻用語索引稿(御牧克己編) 三月  
本物の生きた対話—覚の宗教(書評) 週間読書人七日号 四月

花のころろ 在家仏教第三一三三三三 四月  
碧落の碑 ブディスト第四号 四月

長沙の雨(土曜随想二) 中外日報二六日号 四月  
供養の文学(同右二) 同右 三日号 五月

にこりぎけ(同右三) 同右 一〇日号 五月  
寿塔のころろ(同右四) 同右 一七日号 五月

天目と柳杉(同右五) 同右 二四日号 五月  
ロバの声(同右六) 同右 三一日号 五月

・山下正男  
宗教と算術 B A S I C 数学 三月  
イデア数と易とアラビア式記数法 B A S I C 数学 五月

・山田慶児  
九宮八風説と少師派の立場 東方学報 五二冊 三月

●授時暦の道—中国中世の科学と国家 みずす書房 四月  
・横山俊夫

ヴィクトリア期イギリスにおける日本像形成についての覚書  
△I△—S・オズボーンとエディンバラの出版社ブラ  
ックウッド— 人文学報 四八号 三月

京都市の文化行政—その課題と施策についての考え方—  
(共同執筆) 京都市 三月

・吉川忠夫  
翻訳・任継愈「儒家と儒教」 東洋史研究三八巻三三三 一二月

師受考—『抱朴子』内篇によせて 東方学報 五二冊 三月  
・吉田光邦

京の造形 「京百選」 一二月  
刊行によせて 「西陣常秀作選」

西陣今昔 花すみれ  
工芸史散策 華道

七千年の歴史 「ベルシア陶器の世界」 一月  
ロウソクの火について 心

日本近代化の脇役たち

伝統工芸の明日

万春

香時計と仏教文化

イスラムの美と環境

床の間

Japanese Aesthetic Ideals

修業の環境

枯山水雑記

●植物とデザイン

ペルシア陶器小史

藍染め

茶のすがた

ごり・友禪

茶道具の周辺

「獅子の時代」 一月

「日本発見」 9 二月

「この店この一品」 Ⅲ 三月

is 〃

「イスラム」 〃

「四季八十彩」 〃

“Japan Style” 〃

京都 〃

「庭と家」 Ⅱ 四月

八坂書房 〃

「ペルシアのやきもの」 〃

きものと装い 〃

「茶席のきもの」 五月

京のれん 〃

月刊京都 〃

現代のエスプリ

染織字序説

コラム

私の読書日記

技術史の一断面

・渡部 徹

水平社創立の社会的思想的背景

東本願寺同和推進本部「同和研究紀要身同」二号 一二月

八〇年代労働運動の展望

全電通学習誌「あすど」二八号 一月

温故知新・今日の部落の現状

近畿郵政局「同和研究資料」 一月

「解放新聞」縮刷版

車両輪が備った（部落解放運動基礎資料集）の紹介

解放新聞 九六六号 四月一四日

(二三頁よりつづく)

に帰国。

○山下正男助教授(西洋部)は、五月一〇

日成田発、ミュンヘン大学、パリ国立図

書館、ローマ大学、アテネ大学で、西洋

論理思想史の研究をし、七月九日帰国。

○前川和也講師(西洋部)は、五月二六日

成田発、エール大学、シカゴ大学オリエ

ント研究所、ローマ大学、大英博物館等

で、シュメール楔形文書の調査をし、コ

レージュ・ド・フランスにおける第二七

回国際アッシリア学会に出席し、十一月

二五日帰国の予定。

○林巳奈夫教授(東方部)は、五月二八日

成田発、メトロポリタン・フィリア・フ

・オグ博物館でシンポジウムに出席、資

